

令和 6 年能登半島地震における災害ボランティアセンター派遣活動報告会兼協働型災害ボランティアセンター運営研修における社協職員支援実践報告2(令和6年11月19日)

【活動報告者】

館林市社会福祉協議会 飯島裕俊 氏

派遣時期：令和 6 年 4 月 16 日～22 日 穴水町災害ボランティアセンター

館林市社会福祉協議会の飯島と申します。

私からは、市町村社協による実践報告として、能登半島地震にかかる災害派遣報告をさせていただきます。

初めに、派遣の概要ですが、私は、災害派遣は今回が初めての経験でした。

派遣時期は令和 6 年 4 月 16 日から 22 日で、活動地域は石川県鳳珠郡の穴水町でした。

派遣前ですが、自分には何ができるのか、また、役に立てるのか、被災地はどのようになっているのかなど、初めての派遣で不安はたくさんありました。

その一方、現地の運営方法などが学べると、派遣について思っておりました。

派遣先の穴水町は能登半島の中央に位置します。金沢市内から車で約 2 時間、宿泊地となった七尾市からは約 1 時間でした。

穴水町までは、「のと里山海道」という道を進むのですが、片側は土砂崩れで通行ができない状況となっており、行きと帰りでは道を変えました。支援に訪れているトラックも多く、最初は初めて見る光景に驚きました。

穴水町災害ボランティアセンターは、穴水町社協がある穴水町さわやか交流館プルートという建物内に設置されていて、同じ建物の中に福祉避難所も併設されておりました。

地元社協職員を初め（被災地の方に）明るい環境で迎え入れていただき、少しでも、この町のためにやれることをやって帰ろうと、決心をいたしました。

運営団体については、地元社協、私達のような応援社協、災害救援活動グループ、NPO 法人など、様々な団体にて、それぞれの役割を持って運営を行っておりました。

この中で、私たち、関東 A ブロックから派遣された 3 人は、ニーズ班の方を担当させていただきました。穴水町では、ニーズ班の中にも、A 班、B 班、C 班と分かれており、一緒に派遣された 3 名がそれぞれの担当職務に就き、A 班はニーズの管理を行い、B 班はボランティアニーズの受け付け及び現地調査、私は C 班の建築士及び技術士案件の担当をいたしました。

C 班の具体的な内容及び流れは、主に技術系と呼ばれる、専門職のボランティアさんとの現調や、依頼者との調整、ニーズの管理を行います。

まず、B 班より一般のボランティアでは困難なニーズなどが繋がれるので、C 班にて受け付けを行います。その後、ニーズ内容に合わせて、建築士案件は、建築士の方と一緒に現地調査を行い、ボランティア実施の可否、及び家屋状況等の確認を行います。ボランティアで

対応が可能な場合は、一般のボランティアさんにつなぎ、もしくは、また技術士の方へつないでいきます。

現調の結果、危険と判断された場合は、申しわけない思いを持って依頼者の方へボランティア派遣のお断りの連絡を入れさせていただいております。

次に、技術士案件は、技術士の方との現地調査、または、ボランティアセンターにて、現調を行い、技術系ボランティアと依頼者の仲介及び調整を行い、ボランティア活動を実施し、終了後に、その技術系のボランティアさんから報告を受け、ニーズが完了となります。技術系ニーズの例として、建築士案件では、応急危険度判定で赤紙の貼られた家や、蔵ですね。で、ボランティアさんが安全に活動できるかの確認や、今後、住める状態であるか確認してほしいなど、そういった内容が多くありました。

派遣時期は、公費解体が始まったばかりだったため、公費解体の申請をするか悩んでいる方も多く、そのような地域の方からの聞き取りを行いながら、建築士の方と一緒にニーズを確認させていただいております。

また、技術士案件の方では、屋根のブルーシート張り、また、お庭に大きな石燈籠をお持ちのお宅がすごく多く、地震の影響で倒れてしまったものを撤去してほしいという案件や、ブロック塀の解体と撤去など、一般のボランティアさんでは難しいニーズの対応を行っております。

派遣時に活動していた技術系ボランティアさんですが、ボランティアセンターに隣接していたアドラというところの事務所を拠点に、アドラさんが、技術系ボランティアの統括を行い、その他にも、災害NGO団体、また、NPO法人、建築士の方や、その他専門職のボランティアさんが活動しておられました。

活動中ですが、私が前任の方から引き継いだ時点で、技術系ニーズの残ニーズの方は50件を超え、地元社協の方も頭を抱えているような状況でございました。

その要因として、ボランティアセンターが週末型に移行していくところで、あわせて、地域の方がニーズの依頼をしてくる人も増え、また、開設時から手がつけられていないニーズというものもありました。

私は活動中に、少しでも残ニーズを減らせればと思い、長期間放置されてしまっていた、燈籠の案件を確認しました。放置されていた理由として、燈籠が災害ゴミで受け入れができるか判断がついていないような状態でした。

そこで、技術系統括のアドラさんに確認を行い、地元社協にて町の方と協議をしていただき、災害ゴミとして受け入れていただくことができ、おかげで燈籠案件のニーズはすべて完了させることができました。

派遣前に学ばせていただいた災害支援の三原則、こちらを意識し、技術系と地元社協、地域の方との橋渡しができるよう、仲介や調整など、初めての経験で、正直、大変なことはたくさんありました。

また、残ニーズを9件残り引き継ぎをしましたが、短期間のため、役に立てたのが目に見

えにくく、やりきれない気持ちを残して、群馬に戻って参りました。

派遣後ですが、まず、被災地は学びの場ではないということです。正直、派遣前は学ぶつもりで考えており、実際に派遣を経験して学ぶことはたくさんありました。しかし、被災地側から見れば、学ぶ場としてとらえるのは、とても失礼なことだと学ばせていただき、よく考えればわかることですが、どこか見落としがちになりえないことだと感じておりました。

また、実際に所属社協で災害ボランティアセンターの設置、運営をしていくことになったらと思うと、うまくできるのかどうかなど、その怖さを感じることもありました。

私の所属社協では、毎年、災害ボランティアセンターの設置運営訓練を行っておりますが、訓練と実践とでは経験が異なり、今回経験したことを、所属社協での訓練に生かし、より実践に近い形で訓練を実施できればと思っております。

また、ボランティアセンターによっては、運営方法などが異なることを知り、派遣先の穴水町ニーズ班でも、独自のマニュアルが策定されており、支援の流れなどがわかりやすく、対応がしやすかったです。

その地域やボランティアの特性を生かして、運営ができるよう、平時から想定される災害を考慮し、備える必要があると思いました。

また、被災社協職員も被災している可能性が高く、休みもないような状態で運営をしており、職員のバランスをとることも大変だと感じておりました。

また、今回の派遣で協働の重要性と、地元社協の受援力の高さを痛感し、私が担当させていただいた技術者、また、建築士案件は、まさに協働がなければ機能はしなかったと考えられます。

社協同士の繋がりや機関が協働して、初めてボランティアセンターの運営ができ、一般のボランティアさんでは対応できないこと、また、職員だけでは判断がつかないことなど、その時には専門知識を持った方が、必ず必要になってきます。

また、近年想定される広域にわたる同時多発災害時の協働連携の図り方などを、平時の際から考える必要があるとも思いました。

派遣先の穴水町ボランティアセンターは、とてもアットホームな空気があり、運営は応援社協を含む、他機関の方に一任しつつ、最終的な判断などは、地元社協で行い、長期で疲弊している中、任せられる力、そして、ボランティアセンターの雰囲気づくりというものができておりました。初めての派遣で、順応できたのは、そのような地元社協があったからこそだと思っております。

群馬県内の社協でも、災害ボランティアセンターの設置、運営を行う際には、無理のない範囲で支援に来てくれる人への配慮ということも意識して活動していければと考えております。

最後に、県内社協間では、昨年度より各ブロックにて構築しております「資機材プラットフォーム」の活用をはじめ、今回派遣した職員間の情報共有や連携が必要と考え、また、今回の派遣で、協働連携の重要性を強く感じ、社協以外の他機関の協力なくしては、運営はで

きません。

ぜひ、平時から連携が図れるような場を作り、協力体制を構築できればと考えております。

現在、地震災害に伴う派遣は終了し、水害に伴う派遣が続いております。

私の所属する館林社協からも、来週より、別の職員が、輪島市の方に派遣されます。

復興にはまだまだ長い月日を要しますが、離れた地から、できる支援を考え、今回の経験を伝えていければと思います、1日でも早く、(被災地に)明るい日常が戻ることを切に願い、派遣報告とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。